

【目的】 共働き夫婦が職務上の移動要請に対し、一時的に離れて暮らすという手立て（つまりコンピューター・マリッジ）を選ぶとして、では、その別居通い合いのライフスタイルを円滑に進めるには、どうすればよいか。本研究によって、コンピューター・マリッジを成功させる要因を明らかにしたい。

【方法】 別居中ないし別居経験ある共働き夫婦50組を対象に面接調査を行い（1989年1月～7月）、その結果を分析した。対象者の基本属性の一端を示せば、年齢は40歳台（44%）、職業は教員（31%）やジャーナリスト（17%）や管理的公務員（14%）、学歴は大学卒以上（91%）、世帯収入は1100万円以上（75%）である。

【結果と考察】 ①回答者の7割がコンピューター・マリッジに伴いうる障害（心身の疲労、二重生活の不経済、家族員のコミュニケーション疎外、健康問題など）を克服しており、この結婚形態の継続と再経験を可能としていた。その「効用」にまで触れとくに高い評価が下していた2ケースと、逆に、危機的状況未解消の3ケースの事情を詳細に検討したところ、当事者・関係者らの性別役割や夫婦同居規範に対する態度に顕著な差が認められた。社会の諸規範に囚われない姿勢。これが、このライフスタイルを成功させる基礎的要因と考えられる。②別居生活は、自分の移動が別居開始の契機となった妻や育児期以後に別居の妻にはプラスであると受け取られ、家事・育児に協力的な夫と育児期において別居する妻にはマイナスであると指摘された。よって、夫婦のライフステージの斟酌、および、育児期にある夫婦への援助も、成功要因の1つである。